第384号
2021年
3月25日
月1回25日発行

げんぱつ
原発住民運動情報

発行所 原発問題住民運動全国連絡センター
発行人 持田繁義／1部300円 年間3,000円
〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町 2-11-13
MMビルⅡ402
TEL 03-5215-0577 FAX 03-5215-0578
郵便振替 00150-7-355202
ホームページ http://genpatu.com/index.html
メール＝genpatu-c@bizimo.jp

福島第一原発事故から10年

ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマを結ぶ「非核の火」と「原発悔恨・伝言の碑」

核兵器廃絶と原発ゼロを祈念

福島・楢葉町 宝鏡寺 3・11点火・除幕式典

核兵器廃絶と原発ゼロを祈念して、ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマを結ぶ「非核の火」と「原発悔恨・伝言の碑」の点火・除幕式典が、福島第一原発事故から十年の三月十一日、福島県楢葉町の宝鏡寺で行われた。「非核の火」は、東京の上野東照宮で三十年間灯し続けた「広島・長崎の火」が移されたもの。百三十人余が参加した。

記念式典は、広田次男氏（福島原発被害弁護団代表）が、呼びかけ人を代表して開会あいさつ。「非核の火」を灯す会共同代表の伊東達也氏（原住連事務代表委員）が主催者あいさつ。

伊東氏は「核兵器も原発も人間がつくったものです。人間の力でなくすことができます」「被災地楢葉町に『非核の火』を灯し続け、『これ以上ヒバクシャをつくるな』と『二度と原発事故を起こすな』の声を日本と世界に伝える決意です」と表明した。

境内に建てられた記念碑に設置された「非核の火」に、上野東照宮からの「広島・長崎の火」からの火を、「灯す会」の伊東達也、佐々島忠男両共同代表が、会場の拍手の中、点灯した。

ついで「非核の火」石碑の隣りに建てられた「原発悔恨・伝言の碑」の除幕を、設置者の早川篤雄・宝鏡寺住職と安斉育郎氏（立命館大学名誉教授）が行った。

宝鏡寺境内に設置された「『非核の火』の碑」に、点火する伊東達也（左）・佐々島忠男（中央）共同代表と早川篤雄宝鏡寺住職（右）

「上野の森に『広島・長崎の火』を灯す会」理事長の小野寺利孝理事長が「広島・長崎の火」の歴史と今回移転で「非核の火」となった経緯を語った。

宝鏡寺三十世早川篤雄住職は、被災地の宝鏡寺への二つの碑と伝言館設置について、原爆投下による戦禍と原発事故による災害を象徴するモニュメントであり、『核兵器のない世界』『原発のない世界』への人びとの思いが込められていることを指摘し、「今後の活動へのみなさんのご協力を心からお願いします」と呼びかけた。

式典は、メッセージ紹介、諸宗教による祈りの集い、カンタータ組曲「この日を永遠に」合唱の紹介が行われた。

「灯す会」共同代表の佐々島忠男氏が閉会あいさつで式典を終えた。

＜福島事故から十年、原発ゼロ基本法の制定を！ 4・4 銀座パレード＞

○日時＝四月四日（日）
＊出発式―13:30～
＊デモ出発―14:00
＊デモ終了―15:30
○場所＝東京・日比谷公園
○主催＝原発をなくす全国連絡会

「非核の火」の碑（二面）
○原発悔恨・伝言の碑（三面）　○伝言館（四面）
○福島第一原発事故から十年（五面）

「非核の火」記念特集号

警鐘

●福島原発事故の被災地・楢葉町の宝鏡寺に、「『非核の火』の碑」と「原発悔恨・伝言の碑」が建立された。原爆・水爆の惨禍と原発災害を結ぶ世界で初めてのモニュメントである●核兵器開発は、原爆の広島、長崎投下（一九四五年）による非人道的行為として出立した。水爆実験はビキニ事件（五四年）をもたらした。原発開発は、米TMI原発事故（七九年）、旧ソ連チェルノブイリ原発事故（八六年）、福島第一原発事故（二〇一一年）と、苛酷事故として三度世界を襲った●ウラン濃縮技術、再処理技術、軽水炉技術等の軍事利用が核兵器・核艦船開発（表の顔）であり、同じ技術のエネルギー利用が原発開発（裏の顔）である。核兵器開発と原発開発は補完関係にある。原発開発は原子力の平和利用とは無縁のものである。原発の危険の淵源は破壊力第一の軍事技術の利用にある●核兵器廃絶運動と原発ゼロ運動は、人類の生存にかかわる運動である。「核兵器のない世界」と「原発のない世界」をめざす運動は、それぞれ独自の運動であるが、共鳴し合う運動でもある●宝鏡寺に設置された碑は、この二つの運動の連帯を象徴する、世界でも初めての記念碑である。

「非核の火」の碑

「非核の火」（中央）の送り側・小野寺利孝さん（右）と。受ける側・伊東達也さん（左）

「非核の火」を送る側の「上野の森に『広島・長崎の火』を永遠に灯す会」理事長の小野寺利孝さんのあいさつなどから、この「火」の歴史を見てみよう。

「広島・長崎の火」は一九四五年当時、兵役で広島にいた故山本達雄さんが原爆投下直後に親族の家に残っていた火を採取し、携帯カイロの火種にして、福岡県星野村（現八女市）の自宅に持ち帰った。村に引き継がれ、保管され、八八年には長崎の原爆投下で焼けた瓦から採った火と合わせてニューヨークの国連軍縮会議に届けられた。

当時の米ソの核軍拡競争へ反対する運動が世界的に盛り上がり、国内では被爆者援護法の制定を求める声が高まっていた。東京・台東区でも「原爆の火」を上野の森に灯そうという運動が起こり、八九年に管理団体「上野の森に『広島・長崎の火』を永遠に灯す会」が発足。九〇年にモニュメントが完成し、「火」が点火された。翌年、合唱団が結成され、山本達雄さんと「火」への思いを謳い挙げたカンタータ「この灯を永遠に」を演奏し始めた。

「灯す会」は毎年、さまざまな「集い」を行い、十周年、二十周年の節目には記念イベントなど行い、「核兵器のない世界」をめざす運動を展開してきた。

上野東照宮の宮司が代替わりし、〇六年から「重要文化財の前で火が燃えているのは危険」と、移設を求められてきた。小野寺氏らは苦悩の移籍先の模索をつづけてきた。

昨年初め、小野寺氏は、福島第一原発事故による避難者訴訟の原告団長・早川篤雄氏、いわき市民訴訟の原告団長・伊東達也氏に相談。早川住職は、宝鏡寺への受け入れを快諾した。

二一年一月、「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマを結ぶ『非核の火』を灯す会」の結成会がいわき市文化センターで開催された。約五十人が参加。伊東達也・灯す会準備会代表が開会あいさつ。「火」を送る側の川杉元延・「灯す会」副理事長、受ける側の早川篤雄住職が交歓あいさつ。「会則案」「事業計画案」「役員案」を審議・採択。佐々島忠男氏が閉会あいさつ。受ける側の「『非核の火』を灯す会」が発足した。

上野から宝鏡寺へモニュメントと「種火」を運んだ上で、原発事故から十年となる「3・11式典」となった。

会場では参加者一同がカンタータ「この灯を永遠に」を合唱

受ける側の「灯す会」に折り鶴が贈られる

上野東照宮から宝鏡寺に運ばれた「種火」

「非核の火」に点灯された「火」は、上野東照宮から運ばれた。

昨年十二月十九日に上野東照宮境内で「広島・長崎の火」の歓送会が行われた。その際、早川篤雄・宝鏡寺住職が「種火」をカイロで持ち帰り、宝鏡寺にガスバーナー装置で巨大ローソクに灯していた。

点灯式では、このローソクの火を、ガスバーナー装置にとり、伊東、佐々島両氏が「非核の火」に点灯した。

「非核の火」記念式典へのメッセージ

「非核の火」記念式典へ、次の個人、団体からメッセージが寄せられた。

〇広島市長　松井　一實
〇長崎市長　田上　富久
〇八女市長　三田村統之
〇原水爆禁止日本協議会事務局長　安井　正和
〇日本原水爆被害者団体協議会
〇日本平和委員会事務局長　千坂　純

原発悔恨・伝言の碑

「原発悔恨・伝言の碑」を除幕する早川篤雄住職（左）と安斉育郎立命館大学名誉教授（右）

原発悔恨・伝言の碑

電力企業と国家の傲岸に
立ち向かって四〇年、力及ばず、
原発は本性を剥き出し
故郷の過去・現在・未来を奪った。

人々に伝えたい。
感性を研ぎ澄まし、
知恵をふりしぼり、
力を結び合わせて、
不条理に立ち向かう勇気を！
科学と命への限りない愛の力で！

早川篤雄（宝鏡寺第三〇世住職）
安斉育郎（安斉科学・平和事務所長）

二〇二一年三月一一日

「原発悔恨・伝言の碑」（**写真と別記碑文参照**）は、早川篤雄（宝鏡寺第三〇世住職）と安斉育郎（安斉科学・平和事務所長）両氏によって設置された。

この石碑は、設置者二人が福島第一原発事故による被災地・被災者の思いの「悔恨・伝言」を共有したものである。

碑文にある「電力企業と国家の傲岸（ごうがん）」ぶりを、国民が知ることは、原発に限らず自らの命と財産を守る前提条件である。それを知らないでは、命と財産の守りようがない。

しかし、このことは、まだ国民の常識となるまでには至っていない。国民がよく言えば「人が良く」、それらの「傲岸」を許している側面もある。

日本の原発推進・核燃料サイクル政策は、その「傲岸」ぶりの最たるものであった。事実、それが福島第一原発事故を招く結果となった。

史上最大の公害となった原子力災害について、「電力企業と国家」に加害責任があることは論を待たない。一方、住民運動の「力が及ばず」も事実である。住民側に深い「悔恨」の思いがある由縁である。

現在、菅義偉政権の登場を許しているのも「禍根」の思いである。

そこで、「碑」は、日本国民にも世界の人々にも、「不条理に立ち向かう勇気を！」「科学と命への限りない愛の力を！」の伝言を改めて伝えている。

原住連の苛酷事故
未然防止の活動

原住連としては、旧ソ連チェルノブイリ原発事故（一九八六年）の現地調査が可能となった九一年以来、五年ごとに現地調査団を派遣してきた。現地調査の最大の教訓は「日本で苛酷事故は起こしてはならない」ことであった。

住民監視の強化を通じて苛酷事故を未然防止する活動であった。この活動で浮上したのは、日本の原発の安全対策で機器冷却系のライフライン（ずさん）の安全管理が極めて杜撰であることであった。「傲岸」の最たるものであった。

例えば、中部電力・浜岡原発の機器冷却系配管が地震時に液状化必至の砂地盤上に支持されていたこと、東北電力・女川原発がチリ地震時の引き潮の際、海水取水口に届かない状況であったこと、東京電力・福島原発は、チリ津波級の津波に機器冷却系の海水ポンプが津波を被ることなどから苛酷事故が必至であると指摘し、抜本対策を求めた。

中部電力、東北電力はこれに対応する対策を措置したが、東京電力は度重なる申し入れを無視しつづけた結果、苛酷事故を起こした。

東北電力は、敷地前方の海底を「−10.5メートル」まで浚渫工事を実施した。これがあって福島原発事故の二の舞を免れ得た。

原住連のこの活動に対して二〇一一年度のJCJ（日本ジャーナリスト協会）賞が授与されたが、これほど深い「悔恨」の思いはなかった。

「伝言館」２階入り口。２階外側壁面にヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマなどの写真展示

「伝言館」は、ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマを結ぶ「『非核の火』の碑」と「原発悔恨・伝言の碑」が設置された石垣台の外側に二階建てで建てられた。二階に出入り口がある。

出入り口以外の二階壁面に展示面があり、ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマの写真が展示されている。

早川館長は、「これらの写真以外に、ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマに至った入り口の日露戦争以来の写真も展示したい。また、外国人が見ても共感を得られる展示を考えたい」と語る。

「伝言館」の三月十一日の開館に向けて、安斎副館長が一週間余、泊まり込みで準備作業を行った。開館当日も直前までその準備に追われた。観覧者は、「『非核の火』の意義がよくわかる展示ですね」「原爆被害と原発災害を結ぶ意味がわかります」と語る。

伝言館内のヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマの展示

早川篤雄住職は、上野東照宮境内での「火」の歓送会（昨年十二月十九日）で、「原発事故被災地で〝世界平和光明の灯〟を灯します」とあいさつ。

原発システムは核兵器関連技術のエネルギー利用で、軍事利用が核兵器・核艦船（表の顔）。エネルギー利用が原発システム（裏の顔）。核兵器と原発は補完関係にあると指摘。「核兵器がある限り原発はなくせない。原発がある限り核兵器はなくせないということです」

「核兵器禁止条約が発効する二〇二一年。核兵器をなくし、平和を実現する誓いの火〟を〝世界平和光明の灯〟として、原発事故被災地で継承して参ります」と語った。

この歓送会で語った早川住職の発言が、「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言の灯」としての「非核の火」「原発悔恨・伝言の碑」「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館」の基調にある。

伝言館とは？

伝言館館長の早川篤雄第30世住職と副館長の安斎育郎・立命館大学名誉教授は、半世紀近く原発批判の活動で共同してきました。

2018年9月、安斎が「原発悔恨・伝言の碑」の碑文を起草し、早川住職ともども、原発事故から10年目の3月11日、宝鏡寺境内に連名で記念碑を建立することにしました。

折から、上野の東照宮境内に灯されてきた「広島・長崎の火」を宝鏡寺に移設する計画が進められ、早川住職はこれに「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言の灯」と命名しました。

「伝言」を共通のキーワードとして計画を進める中で、早川住職は将来にメッセージを伝える博物館を開設する構想をあたため、これに「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館」と名づけました。館長は早川篤雄住職、副館長には平和のための国際博物館平和ネットワークの名誉ゼネラル・コーディネータである安斎育郎に加えて、被災者支援のための「福島プロジェクト」で長年共同してきた桂川秀嗣・東邦大学名誉教授も加わりました。

伝言館は人類が核の被害を繰り返さないために、今後もメッセージを発信し続けたいと思います。

福島第一原発事故から10年

被害は継続し、拡大している

原発事故は10年たってもつづいている。拡大している。事故収束対策としての東電の「40年で更地にする」という「廃炉ロードマップ」はすでに破綻している。

福島第一＝1、2、3号機の880トンとされる溶融燃料（デブリ）について、その実態の掌握もできていない。まして技術的に取り出せるのかはまったく不明だ。

使用済み燃料の取り出しは、3号機は終了したものの、他の取り出しの見通しは立っていない。

事故収束作業で出る放射性廃棄物は、がれき、伐採木、防護服などが大量に集積している。さらには汚染水処理で出る汚泥や吸着フィルターなど、使用済み核燃料、デブリや建屋解体で出る高レベルの保管と最終処分のメドもついていない。

汚染水対策は、貯蔵タンク容量が昨年末までの137万トン設置が限界だとして、被災地に海洋放出を迫っている。そもそも、わずか10年で破綻する汚染水対策を採用した責任を棚上げして居直るとは、断じて許されない。

いま、福島では、避難指示の解除とセットで、賠償や支援を打ち切りがすすんでいる。

福島の避難指示が出た12市町村で、いまだふるさとに戻れていない人は5万3484人である。避難指示区域外の「自主避難者」を加えれば、さらに増える数になる。福島県は「3万6000人」というが、避難者の数そのものがつかまれていない。

これでは、住民本位の被災者対策、復興対策をたてようがない。

避難生活の苦悩や不安は、震災関連死2320人（3月21日現在。直接死1606人）や孤独死52人、自殺118人などの数に端的に示される。

避難指示が解除されても戻る人が少ない。若い世代は遙かに少ない。この10年で家が朽ち、商店街も住宅街も荒廃がひどく、医療施設、商業施設も少なく、地域社会はまともに機能していない。

にもかかわらず、自主避難者への無償住宅支援は2017年3月、営業賠償は2017年7月、精神的賠償は2018年3月に、原則打ち切りとなった。

除染による汚染土などを集積する中間貯蔵施設は30年後に県外搬出とされるが具体策は示されていない。

事故10年を経て、福島原発事故はなかったことにされかねない事態が進んでいる。

こうした中、全国各地で国と東電を相手に30近い集団訴訟が行われている。最後まで救済対策を求める大切な取り組みである。

福島原発（第一、第二）は、チリ津波（1960年）後に建設されながら、チリ津波級の津波対策さえ措置されていなかった。国の地震予測「長期評価」に基づく津波対策を怠ってきた。東電と国の責任は重大である。

この現実を認める司法判断が示されるようになり、昨年来、仙台高裁、東京高裁でも示された。だが、これを認めない判決があることは事実であり、改めて忖度司法が問われる。

菅自公政権は、原発固執をつづけている。なんとしても再稼働したい、福島は終わったことにしたいとの執念がある。ここに、事故の被害が継続し、拡大している根源がある。

次の総選挙で菅政権を退場させ、原発ゼロをめざす政権交代が切実に望まれる情勢となっている。

菅首相「東電、原発扱う資格に疑念」

東京電力の柏崎刈羽原発（新潟県柏崎市、刈羽村）で、不正な侵入者を検知する設備に複数の故障が見つかった問題で菅総理大臣は、参院予算委員会で、原発を扱う資格に疑念を持たれてもやむを得ない事態で、東電は抜本的な対策を講じる必要があるとの認識を示した。このなかで菅総理大臣は「東京電力が重大で不適切な事案を起こしたことは大変遺憾で、極めて深刻に受け止めている。地元の信頼を損ねる行為で組織の体質や原発を扱う資格にまで疑念を持たれてしまってもやむをえない」と述べた。

東海第二運転差し止め

原電＝東海第二原発（茨城県東海村）の運転差し止めを求めた住民訴訟で三月十八日、水戸地裁（前田英子裁判長）は「防災極めて不十分」として運転差し止めを命じる判決を言い渡した。

各地からの便り

この欄は各地からの通信をもとにして編集しています。

反原連が最後の大規模集会

原発ゼロ☆国会前集会―福島事故から10年・福島とともに」

福島第一原発事故を受け、毎週金曜日に首相官邸前での反原発集会などを主催してきた首都圏反原発連合による最後の大規模集会「原発ゼロ☆国会前集会―原発事故から10年・福島とともに」が三月七日、国会前で開かれた。

「再稼働反対」「原発いらない」のプラカードを手にした市民と野党議員が参加した。

主催者あいさつしたミサオ・レッドウルフさんは「事故から十年たっても福島のみなさんを置き去りにしたままげんぱつを推進しようとしている」と自公政権の原発固執を批判、「休止しますが、解散はしません。みなさんを声をあげつづけます」と語った。

日本共産党の志位和夫委員長、笠井亮衆院議員、吉良よし子参院議員、立憲民主党の菅直人元首相、大河原雅子、山崎誠の両衆院議員、社民党の福島瑞穂党首、れいわ新撰組の辻村ちひろ東京8区総支部長が訴え。野党議員がステージに並ぶと、「野党は共闘」のコールが起こった。

作家の落合恵子さん、元西武百貨店社長の水野誠一さん、落語家の立川談四楼さん、精神科医の香山リカさん、哲学者の西谷修さん、作家の中沢けいさん、元経産官僚の古賀茂明さん、社会学者の小熊英二さんら著名人・文化人がスピーチした。

参加者は、十年たっても事故は続き拡大していること、被災者への賠償と支援の打ち切りを許さないこと、野党共同提案の「原発ゼロ基本法案」を成立させて「原発ゼロ」を実現するなどの課題を共有し合うことを確認した。

首都圏反原発連合の九年間の活動「市民が主人公」の新しい市民運動

毎週金曜日の首相官邸前抗議は二〇一二年から始まった。反原連の活動は、戦後かつてない「市民が主人公」の新しい市民運動をつくりあげた。

一回目は三月二十九日。当時の野田佳彦首相が大飯3、4号機（福井県おおい町）の再稼働を強行しようとするなかだった。野田政権が再稼働を決定すると、六月二十九日（金）には、官邸前を二十万人以上が埋め尽くし、「再稼働反対」の声が官邸、国会を包囲した。反原連代表らは野田首相と面会し、原発の再稼働中止や原発ゼロを要請した。市民運動が政治を動かす力となっていることを示した。

反原連は、市民が多数参加しやすいように、のぼり、プラカードも脱原発に限定し、「非暴力」の姿勢を貫いてきた。

官邸前抗議に二十万人が参加した際、官邸突入を試みるものがいたが、この動きに、女性リーダーが「私たちの運動は、世論を広く高めることだ」として、敢然と対峙し、運動の暴力化を抑えた姿は、「日本のジャンヌダルク」として報道された。

全国各地でも、「金曜日行動」として脱原発を求める活動が広がった。

「何かあったら官邸前へ」と、安保法制反対などさまざまな市民運動としても広がった。

「市民と野党の共闘」の〝生みの親〟

反原連は、毎週の抗議に加え、「拡大版」の官邸前抗議、国会正門前での大集会を繰り返し取り組んだ。一六年一月の「拡大版」官邸前抗議には、五野党（当時）の代表がきたのを皮切りに、大集会に野党議員が参加することが定着。「市民と野党の共同で原発のない日本を」との意思をともに示す場となってきた。

一二年七月十六日、「NONUKES」の一点で、反原連と「原発をなくす全国連絡会」「さようなら原発1000万人アクション」の初めての統一行動が東京・代々木公園で行われ、十七万人が参加した。

反原連は、抗議開始から九年、スタッフの負担もあり、毎週金曜日の抗議は、この日を最後に休止するが、原発ゼロを実現するまで解散せず、情報発信など取り組みは進める。共同を！

読者の拡大はなし　講読打ち切りは四人

この間の読者の拡大はありませんでした。講読の打ち切りは岩手一、埼玉一、福島二の計四人でした。

二月の事故等

プールの核燃料 566体搬出完了

福島第一＝3号機

東京電力は二月二十八日、福島第一＝3号機の使用済み燃料プールから核燃料566体を搬出する作業を完了したと発表した。炉心溶融を起こした1～3号機のうち、プール内の核燃料の取り出しが終わるのは初めて。4号機の1533体は二〇一四年十二月に終了。

遠隔操作で専用容器に収容した最後の6体を、同日に敷地内の共用プールの貯蔵施設に移送した。放射性物質が拡散しないように、建屋上部を覆う大型カバーを設置して作業した。

3号機の燃料搬出は二〇一四年にも開始予定だったが、建屋の水素爆発によるがれき除去が難航した上、プール内への機器の落下事故、クレーンの異常、ケーブルの腐食などトラブルが多発。搬出開始は四年以上ずれ込んだ。一九年五月の開始後も燃料をつかむハンドル部の変形などに見舞われた。

建屋上部にがれきが散乱する1号機、建屋内の放射線量が高い2号機は三一年までに全ての取り出しをめざすとしている。

事故前、専門家が津波対策を促す…

東京地裁の株主訴訟

福島第一原発事故で、勝俣恒久元会長ら五人が津波対策を怠ったとして、東電に二十二兆円を支払うよう求めた株主代表訴訟の口頭弁論が二十六日、東京地裁（朝倉佳秀裁判長）であった。旧原子力安全・保安院で安全審査にかかわった地質学者の岡村行信氏の承認尋問が行われ、事故前に東電社員へ津波対策を促したと証言した。

新たに「未完了工事」検査終了「未定」に

柏崎刈羽7号機

東電は二十五日、柏崎刈羽7号機（新潟県柏崎市、刈羽村）について安全対策工事が終わっていないことが新たに見つかり、検査工程の六月終了予定を「未定」と変更することを原子力規制委員会に申請した。

地震で汚染水タンク53基にズレ…

福島第一原発

東電は二十四日、福島第一原発の敷地内で汚染処理水を貯蔵タンク53基が、十三日の地震でずれ動いたことを確認したと発表した。ずれは最大で19㌢。タンクをつなぐ連結管の五個所で変位量がメーカー推奨値を超えたが。現時点で漏洩はないとしている。

応力腐食割れ亀裂 超音波試験を拡大

大飯3号機

関西電力は大飯3号機（福井県おおい町）の定検中に、加圧器スプレイライン配管溶接部に傷が見つかった問題で、関電が、応力腐食割れが進展したとみて、起動前に超音波検査を拡大実施する方針について、規制委は、二十四日の定例会で了承した。

地震計の故障放置して記録取れず…

福島第一＝3号機

福島第一＝3号機に設置された地震計2台が故障したまま放置されていたことから、十三日の地震の記録が取れていなかったことがわかった。規制委の二十二日の規制委の会合で委員の質問に東電が答えて明らかになった。

地震で原子炉格納容器内水位が低下

福島第一＝1、3号機

東電は二十一日、福島第一＝1、3号機の原子炉格納容器内の水位が低下したと発表した。水位低下の要因は、十三日の地震による格納容器損傷部の状況変化も考えられるとしている。

1号機は十五日以降、3号機は十七日以降に、格納容器温度計の一部に低下傾向が見られた。

いわき支部、東電に6億円賠償命令

山木屋地区避難者訴訟

福島第一原発事故で避難指示が出た福島県川俣町山木屋地区の住民ら二百九十七人が、東電に慰謝料など計約147億円の損害賠償を求めた訴訟の判決が九日、福島地裁いわき支部であった。名島亨卓裁判長は二百七十一人に総額約6億円を支払うよう東電に命じた。

高浜町長、老朽原発の再稼働に同意

高浜1、2号機

運転開始から四十年を超え老朽化した高浜1、2号機（福井県高浜町）をめぐり、野瀬豊町長は一日、関西電力が狙う再稼働に同意の意向を表明した。四十年超原発の再稼働に地元町長が同意するのは初めて。杉本達治知事に近く伝える。杉本知事は再稼働の前提として、使用済み核燃料の貯蔵施設の県外候補地の明記を求めているが、関電は候補地を示していない。

書評・書評・書評・書評・書評・書評・書評・書評・書評

『私の反原発人生と福島プロジェクトの足跡』

安斎育郎著　かもがわ出版　本体千八百円＋税

〝原子力村〟の本陣にあってブレーキ役に回る

「原発事故から福島通い十年間　国・電力会社からは危険人物視　反原発を貫いた反骨の人生」　これは帯かけの横書きである。池内了氏（名古屋大学名誉教授）が「原発に誠実に向き合えば反原発にならざるを得ない。安斎さんの人生哲学がよくわかります」と推薦文を書いている。

帯かけに書かれた宣伝文句には、とかくおおげさなものが多いが、本著の場合はきわめて適切である。

著者は、東大工学部原子力工学科の第一期卒業生。卒業論文は「原子炉施設の災害防止に関する研究」である。原発を推進する上での高級技術者養成を期待された原子力工学科であるが、著者はその道を外れて〝ブレーキ役〟に回った。

東京大学の〝万年助手生活〟を経て、一九八六年、立命館大学経済学部の教授となる。これを「週刊朝日」は「東大助手『ガラスの檻（おり）』に幽閉17年」と、「朝日新聞」（八六年三月五日）は「名物の〝万年助手〟また一人東大去る」と書いた。

いわば〝原子力村〟の本陣にあって、無体な仕打ちに、矜持（きょうじ）をもって対処した、この体験が著者の人生哲学を深め、高めた。

日本学術会議での問題提起、日本科学者会議の常任幹事としての活動など、折々に生じる原子力問題に取り組む。

立命館大学に移った二年後の八八年、「国際平和ミュージアム」立ち上げに参画し、九二年五月開設。館長代理を務め、館長、終身名誉館長となる。「平和のための博物館国際ネットワーク」のゼネラル・コーディネーターを務める。

七〇年代から八〇年代、地域住民と手を携えて原発政策批判に取り組む。特筆すべきは一三年五月、被災者支援の福島プロジェクト立ち上げとその活動である。年十回程度、福島に通い、現地調査、放射能下のさまざまな生活相談、学習会に取り組む。著者は手品の名手。ユニークな語り口が住民との対話を豊かにする。

著者は七三年以来、宝鏡寺の早川住職と原発批判に取り組む。著者の活動は、福島原発事故から十年目の二一年三月十一日に点火・除幕した「非核の火」と「原発悔恨・伝言の碑」「伝言館」に引き継がれる。

原発問題の解説

原発の日本立地の七重の潜在的危険⑤

地理上―人口過密地帯に近接・集中立地の危険

欧米では、原発立地は「ある距離の範囲内は非居住区域であること」「非居住区域の外側の地帯は低人口地帯であること」とされる。米ランチョ・セコ原発を訪れた際、その立地の様がその通りであることを実感した。日本の原子炉立地審査指針は冒頭、同じように書かれている。しかし、日本の原発立地は、人口過密地帯に近接し、しかも集中している。それは、日本では原発立地が先行したからである。その既設炉を追認する形で後追い的に規制指針等が策定され、「安全審査」が行われたからである。日本の規制は主客転倒である。福島第一原発事故では、1、2、3号機が連続して苛酷事故を起こした。集中立地の危険が劇的に示された。

編集後記

◆「非核の火」「原発悔恨・伝言の碑」点火・除幕式典は、コロナ禍とあって、参加数を五十人に絞り、コロナ対策の徹底を図ったが、百四十人が参加した。大衆的な集会は八月六日に予定される◆原住連から柳町、出馬両代表委員と斎藤事務局員が参加した。点火・除幕式典を報じた「げんぱつ」（二〇年八月号）で知った読者から早々に参加申し込みがあった。読者の関心を呼んでいたが、今回は、自粛をお願いした◆点火・除幕式典参加者に「祝・紅白饅頭」が配布された。岐阜市内の「新月軒本舗」から発送されたもの。コロナ禍で到着が、早くて式典中（14:00~16:00）といわれたが、何とか間に合う◆岐阜市からの参加者は「新月軒は私たちの事務所から五十㍍のところにある店。福島被災地に出てきて、岐阜産饅頭に出会うとは…」と驚く。